

2019年12月9日(月)

老球の細道514号

## 「ONE TEAM」(ワンチーム)

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

その年に話題となった新語、流行語を決定する、年末恒例の「2019 ユーキャン新語、流行語大賞」の年間大賞に、W杯ラグビー日本代表チームのスローガンだった「ONE TEAM (ワンチーム)」選ばれた。

決定の前日、会津バスケットボール協会の「トップアスリート教室」で受講生、講師に今年の大賞を予測する質問をしたところ、松井遵一郎先生が見事に予測していた。残念ながら、私が自分のスローガンにしていた「ちょっとづつ(猪突)猛進」は話題にも上らなかった。

選考理由は、どんな強いチームでも、選手の思い、心が一つにならなければ大事をなすことはできないこと、7か国15人の海外選手が一つにまとまって史上最高の成績を残したところから、排外主義的な空気が漂う中、近い将来移民を受け入れざるをえない日本の在り方に一石を投じたということだった。

年末、忘年会を控えた今、このスローガンはチームワークの大切さを表す意味で、色々な所で流行ることだろう。しかし、私は共感するところはあるが、真似することは避けたいと思う。なぜなら、日本のバスケット旋風がラグビーにすっかり奪われてしまったからである。

朝日新聞の「読者の窓」には次のような意見が掲載されていた。

【「我が社もONE TEAM (ワンチーム)で・・・」、忘年会のあいさつで流行るに違いない。ラグビー日本代表のワンチームには私も共感した。しかし、無判断、無批判で組織優先を奨励するような乱用はご遠慮願いたい。(中略)。ラグビーは最も多様性を認める競技であり、選手の流動性は高く、国籍の垣根も低い。フィールドでは各自の自立した判断が奨励される。それぞれの強烈な個性をまとめ上げるための言葉がワンチームだ。しかし、“自立した個”が強いとはいえない日本人は、同調圧力に流されやすい。ワンチームを唱える前に、個を磨き上げるプロセスを忘れないで欲しい】

バスケットボールのチーム力を向上させることも同じだ。「君がよくならなければチームは良くなる」。それぞれがファンダメンタルと1:1の個人技を向上させる。そのうえでチームプレイのコンセプトに沿いながら個人技を活かす。個人技の引き出しが多ければ多いほどチームプレイのケミストリーも多くなる。

ここで邪魔になるのが「誤った自立した個人」わがままである。「俺が、俺が」である。マイケルジョーダン&室井曰はく「TEAMに〈I(俺が)〉の字はない。しかし〈I(愛)(チームのために)〉は必要だ」。

2019年もいいよいよ最後の月を迎えた。各チームには「一つになれない」悩みを耳にする。自然界は摩擦によって火がともるように、人間社会も人間関係の摩擦によって新たなチームイノベーションが起こるかもしれない。「人間万事塞翁が馬」である。